

本書は平成二十五年に刊行された『北関東の戦国時代』（高志書院）に続く、北関東の中世をテーマにした論集の第二弾である。前回は平成二十三年に北関東三県の県立博物館が共同で開催した「北関東三館連続シンポジウム」の成果報告であった。今回は、平成三十年に同じ三館が三回連続で開催した、同名のシンポジウムの成果報告として上梓するものである。本書のタイトル『中世の北関東と京都』は、この三館シンポジウムのテーマでもある。

さて、『類聚三代格』所収の昌泰三年（九〇〇）九月十九日の太政官符は、坂東における「僦馬の党」の活動と、それに対する朝廷の対応を知る史料として有名である。僦馬の党とは、駄馬を略奪し、その駄馬を使って東山道と東海道の間を交易して財をなした群盗勢力であった。国司が追捕しようとしても、僦馬の党は国境を越えて逃げてしまう。そこで、朝廷は上野国の碓氷坂と相模国の足柄坂の二箇所に関を置き、これを取り締まるようこの官符で国司に命じたのである。両坂に関が設置されたことにより、「坂東」に代わり、以後「関東」の語が定着していく。また、僦馬の党が道という行政区分をまたいで活動したことで、両道八カ国の地域的一体化が促された。こうして生まれた「関東」は、令制の枠組みを越えた独自・固有の地域概念として、列島史の一角を構成していくことになる。

筆者はこの九世紀末の坂東の実情と京都の対応が、関東中世史の特質を規定する基盤的条件になっていると考えている。つまり、関東が東山道（山辺）と東海道（海辺）という異なる二つの行政区の融合体であること、そして、そうであるがゆえに京都と交信することのできる二つのチャンネル（道路）を持ったこと、その二点である。九世紀末から十

世紀初頭の倭馬の党の活動は、武士成立史においてしばしば注目されてきた事象であるが、関東という地域形成史にとつても大きな画期となっているのである。

「中世の北関東」とは言つても、「関東の北の方の中世史」というような単純なことには決してならない。なぜならば、北関東三県の領域は、歴史的には東海道の常陸と下総北部、東山道の上野と下野に相当する。つまり、北関東も関東全体と同様、東山道(山辺)と東海道(海辺)という異なる二つの行政区、もしくは地域で成り立っているからだ。そして、このことを地域としての「北関東」理解の前提条件と捉えれば、京都との関係性の観点から、中世北関東の特殊性への理解を深化させられる可能性がある。また、同時に北関東自体が一様でないことも、やはり京都との関係性において浮き彫りにすることができる。この二点が本書の問題視するところであり、ねらいである。そのため、各論者は上野・下野・常陸各国の立場と時代(平安・室町・戦国)をまず明確にしている。そして、それぞれの位置から京都との関係性を論じる構成になっている。

本書の部構成と、各部の概要は次のとおりである。

第一部「北関東の武士・荘園と平安王朝」は、第三回シンポジウム「中世東国武士の成立をさぐる」(十一月二十四日、栃木県立博物館)の成果とその関連論考である。武士と荘園という中世社会を構成する二つの要素の成立を、中央と地方の視点で捉えようとするとき、かつては地方の側に重心を置いた議論が主流であった。しかし、現在では、例えば武士の成立に関して言えば、武士の職能を支える武芸の成立と継承の契機、武士の本拠とネットワークをめぐる議論などにおいて、中央主導の視点、あるいは中央と地方の相互交流(都鄙間交流)の視点が重視されている。また、荘園の成立に関しては、在地領主の開発・寄進よりも、中央権門と王権による立荘手続きを契機と捉える立荘論などがそれぞれある。では、北関東地域は京都とどのような関係性の中で、中世社会を成立させていったのだろうか。

そこで、下野国では、藤原秀郷流武士団の成立、及び鎌倉幕府草創期に正当な武芸と評価されていた秀郷流故実の

成立契機に関して、都鄙間交流の視点から再検討する。常陸国では、常陸平氏の成立と展開を、留住貴族をめぐる都鄙間交流、さらに伊勢平氏への継承を見据えて再構築する。上野国では、浅間火山災害からの復興が契機となったとされてきた北関東の荘園成立に関して再検討を試みる。ここでは、野口実、山本享史、飛田英世の各氏と築瀬大輔が報告する。

第二部「北関東の国主と京・鎌倉両公方」は、第二回シンポジウム「南北朝・室町期の北関東と京・鎌倉」（九月八日、茨城県立歴史館）における成果とその関連論考である。十四世紀前半に起きた鎌倉幕府の滅亡、建武政権の瓦解、観応の擾乱など、相次ぐ内乱状況の中で、武家社会は京・鎌倉の両公方を軸とする新たな政治体制を構築した。しかし、政治的流動化を完全には収束させることはできず、京・鎌倉両公方自体が新たな対立軸、紛争の火種へと変貌していった。こうした情勢の中で、北関東諸国の国主（国司・守護）の政治性を京・鎌倉との関係性の中で探る。

上野国に関しては、本来京都を拠点とした上杉氏が守護となり、さらに関東管領として鎌倉府において重きをなした。この時代にあってもなお京都との結び付きが強い上杉氏が、この時代の北関東情勢にどのような影響力をもつのかを問う。下野国は京・鎌倉両公方となった足利氏発祥の地であるが、この時代は国主の地位をめぐる小山氏と宇都宮が抗争した。そして、両氏が公方足利氏とどのような関係性を構築していかかが焦点となる。常陸国は北朝方の佐竹氏の在京活動に注目することで、南朝方の小田氏との関係性を相対化し、再検討の土俵に立たせることができる。ここでは、清水亮、寺崎理香、佐久間弘行、森田真一の各氏が報告する。

第三部「北関東の大名・国衆と織田政権」は、第一回（群馬）シンポジウム「織田政権と北関東」（五月六日、群馬県立歴史博物館）の成果とその関連論考である。天正十年（一五八二）、織田氏が武田氏を滅ぼして上野国に侵入し、「東国御一統」を号令した。それまで、関東の大名・国衆は内向的な抗争に終始していたが、その抗争の継続を畿内（天下）権力によって初めて、そして直接的に否定されたのである。織田氏による関東の惣無事は、信長の死によってわずか

三か月で終止符が打たれたが、それから四年後の豊臣秀吉による惣無事、さらにその四年後の小田原北条氏の滅亡によって、段階的にそれが達成されていったと捉えるとき、天正十年の織田氏の北関東駐留は実に大きな画期であったと再認識できる。その時、北関東諸勢力が織田氏といかなる関係性をもったのか、また北関東三国のそれぞれでどのような政治的関係性の相違が見られるのか。こうしたことを整理することは、その後の終末期北条氏の八年間を理解する上でも重要な課題である。そして、中世最末期の京都と北関東が惣無事という政治思想を介して結ばれたことの意味を探る。

この時の上野国は、武田氏遺領として織田氏が直接領有し、重臣滝川一益が厩橋に拠点を置き、上野国衆をその統制下に置いた。その点で、北関東において特殊な位置にあった。下野国では、反北条氏の主軸を担う宇都宮・那須氏が、織田氏の「東国御一統」をどう見たのかが問題になる。これに対して、北関東で最も早く織田氏と接触していたのは、反北条氏の急先鋒が割拠する常陸国の勢力であった。織田氏の撤退後、厩橋の毛利北条氏と沼田の真田氏を除き、国衆がほぼ一斉に北条氏に帰順した上野国とは対照的な状況にある。そして、織田氏はこうした北関東の諸勢力との交信を通して、どのような東国政策を構想したのだろうか。ここでは、金子拓、青木裕美、江田郁夫、長塚孝の各氏が報告する。

さて、地方史研究協議会の平成三十年度・第六十九回(神奈川)大会は、「拠点にみる相武の地域史―鎌倉・小田原・横浜―」の共通論題で開催された。現在の神奈川県域が中世と近代において、関東の政治・軍事・通商の各拠点を擁したことを問題視したものである。これに江戸・東京を加えれば、中世から現代に至るまでの「相武」の地域性がより鮮明になっただろう。しかし、同大会では「相武の拠点性」に對置すべき歴史的地域概念が提示されなかつたためか、議論が「神奈川の拠点」から抜け出せなかつた感がある。ではここで、鎌倉・小田原・江戸・東京・横浜を包摂する地域を「南関東」と言い換えてみるとしよう。これに對置する地域区分は必然的に「北関東」ということになる。